



Title	梶井基次郎『桜の樹の下には』論(二〇一二年度卒業論文要旨集)
Author(s)	市川, 大貴
Citation	札幌国語研究, 18: 80-80
Issue Date	2013
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/7593
Rights	

梶井基次郎『桜の樹の下には』論

近代文学研究室 九四〇九 市川 大貴

本研究では、多くの先行研究が小川和佑氏の『桜の文学史』（文春新書 二〇〇四）を使っていることに注目した。そして、この『桜の文学史』を使うことの問題点を挙げて、その問題点を解消する新たな論を提案した。

まずは、梶井基次郎の封書に注目し、そこに残されていた「桜」に注目した。そして封書が書かれた時期等から桜の種類を考え、『桜の樹の下には』に登場する桜について考えることはできないかを考えてみた。その際に、薄翅かげろうとの関連についても考えた。そして、作品を三つの場面に分け、作家の生涯と関連させながら作品の主題を考察した。その後、この作品の着想について探った。最後の章には、初版では「木」となっていた箇所が「樹」となっていたために、梶井の他の作品と比較して、「木」と「樹」の用例の違いがないかを考察した。

桜とかげろうの存在する時期を考えることで、小川和佑氏の意見を採用する必要が必ずしもないことがわかった。また、梶井が植物に関して専門的な知識を持っており、その知識をこの小説にも多く用いていることがわかった。